近世節用集付録研究のための覚書

——日本図研究と『節用集大系』——

Memoranda for Study of Appendices to Early Modern Setsuyoshu: Refer to Japanese Map Study and "Setsuyoshu Compendium（節用集大系）"

佐藤貴裕[1]

SATO Takahiro[1]

［キーワード Keyword］　辞書史　地理史学　蝦夷図　『倭節用集悉改嚢』　『倭漢節用無双嚢』

［所　属 Institution］　[1]岐阜大学教育学部（Faculty of Education、Gifu University）

［要　旨 Abstract］ここ数年、近世節用集の付録類について、複数の視点から検討を試みている。本稿では、日本図をめぐることがらについて検討を試みたが、佐藤（二〇二二）の姉妹編であり、補遺ともいうべきものである。

日本図に言及する論考に接していると、日本図そのものへの判断はともかく、近世節用集の利用法について、やや気になる事例に行きあたることがあった。これは、依拠するところの大空社刊『節用集大系』全一〇〇巻の編集のありようと、利用しようとする研究者とのあいだに存する認識の異なりに起因するものと考えられた。このまま放置すれば、隣接他分野との提携研究などにも支障を来しかねないと考え、同大系の利用上の注意点に言及した。

第一節　近世節用集所掲日本図の傾向

〔一〕所掲日本図大概

近世節用集はどのような日本図を付録として用いたのだろうか。幕府としては、慶長期（あるいは寛永期）作成とされるもののほか、正保期・元禄期に日本図を作成しているが、ここでは、節用集に直接・間接に関係することになる日本図の流れをまずは把握しておく。蘆田伊人（一九三〇）・上杉和央（二〇〇七）・海田俊一（二〇一七）ほかを参照した。

まず、日本図として最古のものに「行基図」がある。行基（六六八～七四九）の作と伝えられるもので、各国は楕円状に表されて並べられ、これを各海道が貫くように記された概念図である。仁和寺蔵嘉元三（一三〇五）年写本をはじめ、『南瞻部洲大日本国正統図』（唐招提寺蔵一六世紀中期写本、寛永ごろ刊本ほか）・『拾芥抄』所掲図（一六世紀中期写本、慶長一二〈一六〇七〉年刊本ほか）などが知られている。

これに海岸線の屈曲を与えたというべきものに『扶桑国之図』（寛文二〈一六六二〉年刊）がある。元禄以降の近世節用集の多くが、まずはこの系統の日本図を付載することになる。

ついで、地誌的情報を豊かに配した『本朝図鑑綱目』（貞享四〈一六八七〉年刊）・『日本海山潮陸図』（元禄三〈一六九〇〉年刊）など、石川流宣（生没年不詳。元禄ごろの浮世絵師）の手になる一連の「流宣図」が一世を風靡するにいたる。

米家志乃布は、『節用集大系』により、近世節用集所掲日本図の大要を次のようにまとめている。必要最小限の引用にとどめたので、詳細は米家（二〇一五）に依られたい。

『万宝節用富貴蔵』（享和二年〔一八〇二〕版）所載の日本図でも、行基図のかたちを残し、「羅刹国」「雁道」も日本の周辺に描かれている。しかし、『字宝節用集千金蔵』（文政元年〔一八一八〕）では、『日本節用万歳蔵』と同様の日本図が掲載されており、その後の『倭節用集悉改大全』（文政九年〔一八二六〕）や幕末の『大成無双節用集』（嘉永二年〔一八四九〕）では、「架空の土地」は消え、日本のかたちも、「流宣図」のような行基図的なかたちではなく、むしろ、「赤水図」のような日本列島が立ち上がった科学的な地図に近いかたちとなっている。このことから、十九世紀前半が、節用集所載の日本図において、行基図のようなかたちと「架空の土地」の消滅時期であるかと思われる。

「赤水図」とは、長久保赤水（一七一七～一八〇一。水戸藩侍講）作の『改正日本輿地路程全図』（安永八〈一七七九〉年刊）である。経緯線を配した日本図として初めて刊行されたものだが、実測図ではなく編集図であるため、国絵図段階の未熟な部分が反映されることもまま認められる。が、全体のプロポーションとしては、現代の日本図に近いものとなっている。

これをおそらくは原図としつつ、見開き一枚に収めたのが、『倭節用集悉改大全』『大成無双節用集』所掲日本図と思われる。ただ、後者の場合はまだよいのだが、前者においては、関東中央部あたりを軸として東北地方を西方向に一〇度ほども回転させており、逆に、九州地方は福岡あたりを軸に東方向に同程度の回転を与えたものとなっている。東北・南西に伸びる日本を見開き一面に収めるためにアレンジしているわけだが、見せ方を優先するあたり、概念図的でもある。その点では、原図の科学性はともかく、思想的には行基図・流宣図の延長線上にあるものといえよう。

〔二〕赤水図系と見る判断基準

そう捉えるとすれば、次の米家の発言の意図も理解できるように思われる。やはり『節用集大系』での調査報告なのだが、先の引用とは小異する部分が注意される。

日本図が掲載されている節用集は元禄三年（一六九〇）刊行の『頭書大益節用集綱目』を初めとして、文久三年刊行の『江戸大節用海内蔵』まで二二点の節用集である。（中略）「日本」のかたちも、『大日本永代節用無尽蔵』所載「日本図」以外は、石川流宣の日本図に見られるような「行基式日本図」の系統である。一方、『大日本永代節用無尽蔵』所載「日本図」は、「流宣日本図」に見られる「行基式日本図」というよりは、どちらかというと（現在の）東北地方部分が立ち上がった「赤水系日本図」のかたちである。（米家 二〇一六。元横書き。洋数字・カンマは漢数字・読点に改めた）

この引用では、『節用集大系』に収載される『倭節用集悉改大全』『大成無双節用集』所掲日本図への言及がないために、それらは非赤水図系のものと見ているのかと思えるが、『倭節用集悉改大全』所掲日本図については、先述のような屈曲によるアレンジが施されているのを嫌って、赤水図系のものから排除したと読み取ればよいように思われる。ただ、『大日本永代節用無尽蔵』所掲日本図でも、アレンジが皆無なのではない。『倭節用集悉改大全』所掲図同様、東日本は関東を軸に西方向に引き起こされるのである。一方、九州地方にはそのようなことがなく、代わりに見開き一面内ではなく、見開き左面の丁裏に回されることになった。この部分はアレンジを施さなかった、施したとしても穏やかなものだったようである。

しかし、結局は程度問題ということもあり、『倭節用集悉改大全』『大成無双節用集』所掲日本図が、赤水図的なプロポーションを伝えていることは明らかかと思われる。したがって、米家には、赤水図の影響下にあるか否かの判断根拠を示してほしく思われる。赤水図系の日本図といっても、原図からの近さ・遠さということもあるだろうから、『大日本永代節用無尽蔵』所掲図が赤水図に近く、『倭節用集悉改大全』『大成無双節用集』所掲図が必ずしもそうではないと判断した基準をである。

第二節　例外的な所掲日本図

〔一〕細みを特徴とする日本図

ここまでに採りあげられなかった一本『倭漢節用無双嚢』について触れておこう。豊かな付録と、全丁ごとに彫師の名を示すなど丁寧な作りのものであり、『万代節用字林蔵』（天明二〈一七八二〉年刊）『万宝節用富貴蔵』（天明八年刊）などとともに、一八世紀後半のイロハ・意義検索節用集の代表格としうるものである。

『節用集大系』にも『倭漢節用無双嚢』が収録されるが、それは寛政一一（一七九九）年の再版本である。これに所掲の「大日本国図」は、見開き右上から左下へぼってりと横たわるものであって、『扶桑国之図』の越後を縮約したものが相近い姿になる。陸奥（南隣は常陸・上野・下野・出羽・越後）は南北に圧縮されており、武蔵と相模を合わせたほどの広さしか与えられていないことや、これと同等の面積で「蝦夷」の一部が示されるなども印象的で注意される。が、基本的には旧態を残す日本図であるため、米家もとりたてて言及することがなかったのであろう。

ところが、『倭漢節用無双嚢』天明四（一七八四）年初版本では、まったく別の「大日本国図」が掲載されるのである。どこをとっても流宣図のように肥満した感じはなく、要所要所で細みを強調したような印象のものである。陸奥もあまりに強い縮小はなされておらず、房総半島はほっそりと描かれる。志摩半島は南東に棒状に突き出されたかのように描かれる。地形の細かいニュアンスなどを描くことがまずないだけに、淡路島の南隣に渦潮が描出されるのは微笑ましく感じられる。四国は極端に縮小されたため、伊予灘が実に広く展開しており、瀬戸内海の水路のような姿は霧消している。九州のプロポーションは比較的よく、流宣図のように北部が西方向になだれこむような表現ではない。全体として、東北・九州はほぼ直立させ、これに関東から中国地方が右下から左上へと渡すように配されており、横方向に引き伸ばしたN字型をとる。房総半島や志摩半島をはじめ、各部の細さあるいは長さが強く印象に残ることもあって、馳せる馬を連想させないでもない。

こうした特徴的な日本図を、『節用集大系』は結果として排除することになった。もちろん、少数の節用集しか掲載しない図であろうから、これを無視することで、かえって大方の傾向を分かりやすく示すことにはなるだろう。少数の例外について言及することは、ともすれば大きな傾向の存在（感）を曇らせかねないこともある。

ただ、正確さが保証されない資料群を用いて済む研究もあるのかもしれないが、やはり研究者の眼によって周到・丁寧になされた調査にくらべれば、情報の学術的な純度・精度は下がらざるをえない。現象の傾向を把握するにしても、対象資料のありようなり偏りなりがあるかないかを見極めて、必要であれば補正・補充を行ない、何が多数派であり、どれが少数派であるかを研究者自身が判断しうる自由度を確保することで、初めて学術的な検討ができるはずである。そうした重要な過程が、検討対象を『節用集大系』に固定した瞬間に省略されてしまうことになる。『節用集大系』に依拠することには、一定の覚悟が必要だということである（後述）。

それはそれとして、『倭漢節用無双嚢』初版の日本図をどのように同定・評価するか、原図の探索も含めて、地図史学の研究者には教えを乞いたく思う。房総半島のすっきりした形を手がかりにすると、たとえば『日本分形図』（寛文六〈一六六六〉年、吉田太郎兵衛刊）などが思い浮かぶが、さすがに、志摩半島の棒状の突出は見られない。実際、『日本分形図』は幕府官撰慶長日本図との関係が早くから指摘されており（蘆田　一九三〇）、慶長図が相応によいプロポーションを確保していることからすると、『日本分形図』を介したとしても『倭漢節用無双嚢』初版の日本図は、相応の変形を受けていることになる。また、米家（二〇二一）も所掲する『〔安永改正〕大日本画図』（『両面大坂画図』裏面所掲。小野田一幸　二〇一五）も興味深い形態を持つ。紀伊半島と四国は、流宣図系のものでも縮小される傾向があるが、『大日本画図』ではさらに大胆に縮小しており、『倭漢節用無双嚢』初版の日本図と相似る部分があるのだが、確定的な判断をくだすには至っていない。

〔二〕『倭漢節用無双嚢』所掲日本図の原拠

さて、この特徴的な日本図だが、原図の探索や評価はさておき、早く『大万宝節用集字海大成』（享保一八〈一七三三〉年刊。金光図書館蔵）[注1]に掲出されるものでもある。他に元文三（一七三八）年版[注2]・元文五年版などがあり、相応に流布したようである。そこで、『倭漢節用無双嚢』初版との関係を整理することで、この特徴的な日本図が『倭漢節用無双嚢』再版には採られなかった経緯について考察をおよぼしたい。

『大万宝節用集字海大成』の作者・版元は次のように刊記に記されている。

作者　伊丹屋新兵衛／書林　大坂安堂寺町五丁目　浅井屋古野源八／同町　秋田屋大野木市兵衛

一方の『倭漢節用無双嚢』初版の版元表示には三タイプある。版木の状況などを検討し、早い順に掲げる。

A　都会／書林／／江府　日本橋南壱町目　須原茂兵衛／浪花　心斎橋安堂寺町　大野木市兵衛／京師　寺町通仏光寺角　中西卯兵衛

B　京都書林　中西華文軒／寺町通四条上ル町／加賀屋卯兵衛

C　京都／書林／／菊屋喜兵衛／丁子屋九郎右衛門／楠見甚左衛門

『大万宝節用集字海大成』と『倭漢節用無双嚢』A段階では大坂の大野木市兵衛が重なるので、ごく単純に考えれば、大野木の版権を根拠として『倭漢節用無双嚢』初版に「大日本国之図」を掲出したものと考えられる。ところが、何らかの理由により大野木・須原が『倭漢節用無双嚢』初版から手を引くことになり、B段階の刊記、すなわち加賀屋単独での刊行が続くことになった。ただこれも最終的にはC段階に示されるように、菊屋らに版権を譲渡するにいたったらしい——と一応の推測はできるのだが、それはそれで問題もある。以下、その点について言及しておこう。

大野木市兵衛らの離脱にともなって特徴的な「大日本国図」も引き上げるのが普通かと思われるが、後刷本でも掲出することからすると、そう単純には解消できない事情がありそうである。本屋仲間記録類にも該当する文書は見当たらないので想像するしかないが、たとえば、加賀屋から経費負担を求められたが応じられないため、やむなく共同出版（相合）から離脱するが、その代償に「大日本国之図」の流用を認めた、といったことが考えられる。こうした版木の利用では、しばしば「版木一代限り」という条件が付されることがある。再版での流用は認めないが、初版版木が磨滅しきるまでは使用を許すわけである。とすれば、特徴的な「大日本国図」が『倭漢節用無双嚢』初版に存して、再版に採られなかった理由も説明できることになる。

大野木離脱の原因として経費負担を持ち出してみたが、これも仮の設定であり、真相は分からない。ただ、刊行から手を引く理由としてもっとも考えやすいものではある。経費の多寡も知られないが、本の内部徴証からすると、たとえば『倭漢節用無双嚢』は毎丁刻工名を記すなど、作りの丁寧さをアピールする傾向が顕著なものである。それに見合う内容上の工夫もなされていたであろうし、書名にもあるように、和漢文物の対照を軸とする付録内容にも反映されてもいよう。付録類も一〇〇種を超えるなど、製品としては手がかかるものと思われる（佐藤　二〇一六）。要は、投資に見合う販売成績があればよいのだが、当時は、早引節用集が一世を風靡しつつあった時期である（佐藤　一九九〇a）。多少の目新しさでは、到底太刀打ちできない状況であったことだろう。

早引節用集は、『倭漢節用無双嚢』初版の刊行される天明四（一七八四）年までも、携帯版の『〔宝暦新撰〕早引節用集』（宝暦二〈一七五二〉年刊）『〔増補改正〕早引節用集』（宝暦七年刊。同一二年・明和五〈一七六八〉年・安永五〈一七七六〉年・天明二年に再刊）『〔増字百倍〕早引節用集』（宝暦一〇年刊。明和六年・安永五年・同九年に再刊）などと、矢継ぎ早に刊行されている。これに対抗すべく新たな検索法を試みた書肆も少なくなかった（佐藤　一九九〇b）。つまり、検索法の改良に書肆たちが血道を上げなければならなかった時期に、付録を奢った節用集がどれほどの販売成績が見込めるかは、少々心もとないものがあるわけである。少しでも早く手を引くことができるのなら、それに越したことはない——大野木が、そう考えて共同出版（相合）から離脱することは容易に考えられよう。

第三節　版種と蝦夷図

〔一〕『倭漢節用無双嚢』初版「大日本国図」の蝦夷地

実は、『倭漢節用無双嚢』の初版と再版とで異なるのは、日本図だけではない。北東に添えられた蝦夷地も大きな差が認められる。

『倭漢節用無双嚢』再版「大日本国図」の蝦夷地は、節用集所掲日本図としては例外的に広い面積で表されるが、文字情報としては「蝦夷」「古ノ毛人国也」「エサシ」「松前」があるだけである。ところが、初版本では、同じ図形ではあるが、その上部に「エゾ」「古ノ毛人国也」と注釈的情報があり、渡島半島とおぼしい箇所に「エサシ」

「松前」がある。また、内陸部には「内浦」「尻別ノ嶽」「臼ノ嶽」「タルマイノ嶽」「高山」「薬ガダケ」の山名があり、底部には標題的に「蝦夷（エゾ）」が記される。つまり山名の分だけ詳しい情報が備わるのである。山並みを示す実感的な図像も添えられるが、このような表現は本土にもないので（朝鮮半島奥には若干ある）、描き手の関心のありようがうかがわれるようで、淡路島南隣の渦潮の描画とともに、興味深いものとなっている。

特徴的な蝦夷図ではあるが、少なくとも文字情報の上では原拠と思われる図にたどりつくことができた。先の六山名は、すべて『和漢三才図会』（正徳二〈一七一二〉年自叙）巻六四所掲の「蝦夷之図」中の六山「内浦ノ嶽・尻別嶽・臼ノ嶽・タルマイノ嶽・高山・薬カ嶽」に逐一対応するからである。現在の名称に比定すれば、それぞれ駒ヶ岳・尻別嶽・有珠山・樽前山・夕張岳・藻琴山になるという（高澤光雄　二〇一八）。名称が大きく異なるものもあるが、「蝦夷之図」の沿岸部には一〇〇箇所ほどの地名が載るので、それらを手がかりにすれば容易に比定できるのであろう。ただ、高澤（二〇一八）は「薬カ嶽」だけ「（現在の藻琴山だろうか）」と控えめに比定するが、『角川日本地名大辞典』（北海道、上）の「釧路」では、

古くはクスリといい、久寿里・久摺・久須里などとも書いた。釧路地方中部、釧路川流域、太平洋沿岸。釧路川沿いに釧路平野（釧路湿原）が広がる。地名の由来に関しては、アイヌ語のクッチャロ（咽喉の意）にちなみ、屈斜路湖畔のアイヌを寛永一二年松前藩が現在の釧路に移して場所を開いたことによる説（北海道蝦夷語地名解）、クシュル（越える道・通る道の意）の転訛で、釧路川上流から斜里方面や標津方面へ越す交通路があったことによる説（蝦夷地名考井里程記・東夷周覧）、クスリ（薬・温泉の意）にちなみ、かつて悪病が流行した時、釧路川の水を呑んだ者は一人も死ななかったという伝承による説（戊午日誌）などがある。

としており、屈斜路湖北隣にある藻琴山を「薬カ嶽」に比定することに無理はない。岡本昭光（一八九七）『北海道渡住便覧』付録「新撰北海道全図」には「クスリ川」源流に「釧路湖」（屈斜路湖）があり、北隣の、すなわち藻琴山の位置に「釧路岳」とあるのなども参考になろう。結局のところ、『倭漢節用無双嚢』初版の蝦夷地の情報は、内陸や、東方の釧路方面という広範囲におよぶことが知られるのである。

米家（二〇一六）の「『節用集体系』にみる節用集所載の地図一覧」との付表では蝦夷地の情報も掲載するが、『倭漢節用無双嚢』の項も再版本によるので、同表の「日本図における「蝦夷地」表現の特徴」の項目にも「蝦夷　古ノ毛人国也」「松前」「エサシ」を転記するにとどまる。また、それらを根拠とするからであろう、「渡島半島の南東部分」を描いたものと注することになっている。他の節用集所掲の蝦夷地の形や面積と大きく異なることに気づいていれば、あるいは『倭漢節用無双嚢』初版の存在に思い至ったかもしれない。また、再版本では、蝦夷地の面積に比して文字情報が少ないこともポイントであったろう。流宣図などの便宜優先の日本図では、各地面積の広狭が文字情報の多寡に相関するようにも見える。したがって、面積に比して文字情報が少ない場合は、何がしかの削除がなされた可能性があると予測することができないではない。もちろん、広狭の差とはいえ程度問題でもあり、佐藤は『倭漢節用無双嚢』初版の密なありようを知っているから、再版の蝦夷地の疎なさまを感じられるだけのことかもしれないが。

〔二〕『倭漢節用無双嚢』初版本の検討課題

このように、『倭漢節用無双嚢』初版「大日本国図」には、『和漢三才図会』「蝦夷之図」に基づくものと思われる、山名情報が特徴的な「蝦夷」の図が備わるのであった。先述のように、蝦夷地の面積としても例外的な広さを持つ点なども含めて、地図史学的にはどのように評価されることになるのか、知りたく思うところである。特に、初版と再版とで六山名を載せるか否かが際立った対立を示すが、そのことの歴史地理学的解釈を知りたく思う。門外漢が単純に考えれば、掲載地名（この場合は山名）の多寡は、そのまま蝦夷地の認知度に比例するように思われるし、ひいては（日本での出版物でのことだから）蝦夷地に対する自国土意識の度合いとも関わるように思われる。もちろん、近世の編纂物ゆえ『倭漢節用無双嚢』初版は単に『和漢三才図会』からの引き写しに過ぎず、再版では版権上の問題から削除されたに過ぎないのかもしれないとしても（後述）。

一方、『和漢三才図会』「蝦夷之図」には多様な情報が認められることも注意されよう。山名のほかにも、一〇〇か所以上にのぼる地名が記されており、遠く「ヱトロツフ島・加良不止島」まで描出される。そうした情報から、『倭漢節用無双嚢』初版編者は山名だけを採り上げたわけだが、それをした基準なり方針なりについても検討したいところである。同時に、朝鮮半島の情報にも注意すると、より的確な分析ができるかもしれない。『和漢三才図会』「朝鮮国之図」に朝鮮八道「京畿道・忠清道・慶尚道・全羅道・江原道・平安道・黄海道・咸鏡道」が載るが、そのすべてを『倭漢節用無双嚢』初版所掲日本図も載せており、再版日本図では「京畿」を残して削除するという、蝦夷地情報と同じ処置が採られるからである。

もちろん、これは、「倭漢」を書名の一部に取り込む節用集が、「倭漢」の対比・対照を演出したであろうこと、そのために対外的な事物に鋭い視線を向けていたであろうことを思うとき、蝦夷地を内側（和）に見るのか、（漢ではないにせよ）外側に見るのかという視点からも興味深い課題のように思われる。そうした事どもが明らかになっていけば、『倭漢節用無双嚢』初版のアイデンティティや編纂思想とでもいうべきものに迫りうる糸口が得られるものと思われる。

〔三〕『和漢三才図会』の出版事情

ここで、『倭漢節用無双嚢』初版にあった蝦夷地六山名が、再版において削除された要因を考えてみたいが、まずは、蝦夷地の文字情報を提供したと見られる『和漢三才図会』の版権のありようを確認したい。ただ、全一〇五巻の大部な挿絵入り類書であり、巻頭には「法皇御所／叡覧」の揮毫を掲出する堂々たる刊行物ながら、その出版にまつわる事情については必ずしも明らかではなく、以下の記述でも可能性を複数提示したり、推測を述べるざるをえない点もあることをお断りしておく。

すべての伝本を調査できたわけではないが、刊記を整理すれば次の三様があるものと思われる。刷りから見る版木の状態を考慮して古いものから掲げる。

A　大坂高津宮北　杏林堂／蔵版全部百五巻／大坂心斎橋筋淡路町／雕刻嶝口太兵衛尉定次

B　書肆／岡田三郎右衛門／鳥飼市兵衛／渋川清右衛門／松村九兵衛／大野木市兵衛

C1　文政七甲申年二月補刻／江都　日本橋南一丁目　須原屋茂兵衛／大坂　心斎橋通安堂寺町　秋田屋太右衛門　＊Bも併示

C2　発行／書房／／江戸日本橋通一丁目　須原屋茂兵衛／同　二丁目　山城屋佐兵衛／同芝神明前　岡田屋嘉七／大坂心斎橋南一丁目　敦賀屋久兵衛／同北久宝寺町　敦賀屋彦七／同堺筋金田町　象牙屋治郎兵衛／　＊Bも併示

Aの「杏林堂」は寺島良安の号であり、ほかには刻工名しか記さないことからすると、印刷・出版は本屋への外注を前提とした私蔵版と考えられよう。大部のものゆえ、版木を調製するだけでも相当の費用・工賃がかかるが、これを回収できなければ書肆の利益はおぼつかなく、損失が発生してしまう。そこで、全工程を書肆が負うのではなく、版木彫刻については良安が負うことになったのではなかろうか。

B所掲の五名は、いずれも大坂の書肆であり、屋号でいえばそれぞれ、池田屋・吉文字屋・柏原屋・敦賀屋・秋田屋となる。Aの代わりに示されたものなので、版木の支配が大坂五書肆のもとに移動したのであろう。ただ、支配の実態がどのようであるかは詳らかにしない。五書肆が版木を買い取る求版がもっとも簡明なケースだが、あるいは、版木自体は寺島家のもとにありつつ、五書肆が都度都度に使用料を支払って借り出し、印刷・出版するという形態であったかもしれない。

ともあれ、書肆が直接版木を管理することになれば、『和漢三才図会』の内容上の優先権を守りやすくはなる。たとえば、大坂本屋仲間では刊行予定書の見本を回覧するのだが、この時点で優先権を侵す点に気づけば、刊行の差し止めや変更の要求など、事態を迅速・簡明に収めることができる。他の本屋仲間から優先権を侵す書籍が刊行された場合でも、大坂本屋仲間の組織力なり格式なりをもとに対処することもできることになる。

〔四〕版木支配の移行時期

そこで、AからBへの切り替わりの時期が問題になるが、『倭漢節用無双嚢』の版元に蝦夷地の文字情報を削除するよう指示・要求できるタイミング——つまり同書初版以降、再版以前であれば問題ない。少なくとも、再版以前のことであれば簡明に考

えることができる。が、島田勇雄（一九八五）は、その時期が明らかではないという。

そこで、参考となりそうな事項を見ておこう。まず、書肆らの刊行書巻末に添えられる自家目録に注意してみよう。たとえば、『源氏鬢鏡』（正徳三〈一七一三〉年、大野木市兵衛刊。北海道大学蔵）所掲の「宝文堂蔵板予顕目録」には

和漢三才図会　寺嶋良安著　八十一冊〔和漢の万物を出し天文地理人事器財宮室艸木禽獣魚介等一切あらゆる事に／図を出し註をくハふ其外国之名所旧跡神社仏閣縁起故事等微細にいだす〕

と比較的長文の内容紹介があり、『絵本故事談』（正徳四年、須原屋茂兵衛・大野木市兵衛刊。肥前島原松平文庫蔵）の「予顕目録　宝文堂蔵版」にも

和漢三才図会　八十一冊〔天文星辰地理山川禽獣人物人事／万物皆図ヲ顕シ詩歌ヲ引註ヲ付ル〕

との短文による紹介がある。「蔵板・蔵版」に注意すれば版木の管理の移動があったか、少なくとも許諾さえ得られれば自由に印刷・出版できる状態にあったことが明らかである。正徳三・四年ごろ、つまりは『和漢三才図会』の（版木の）完成当初から、そうした状態にあったと考えることができよう。あるいは、「予顕」に注意すれば、完成当初よりは幾分下った時期を想定するのが穏やかかもしれない。

ただ、これらは自家版に付された自家版目録であるから、一種、私的な存在とも見られよう。そこで、より客観的な指標として書籍目録を利用することが考えられる。

まず、『新書籍目録』三（享保一四〈一七二九〉年刊）に「〔八十二〕（ママ）和漢三才図会　寺島良安」と見えるのが注意される。版元名まで記すことはない資料だが、この種の書籍目録が販売目録としての性格を持つならば、享保当時、すでに岡田ら五書肆の管理に完全に帰していたと考えてよかろう。なお、これより前の『増益書籍目録』（正徳五年刊）には掲載されないことを合わせ考えれば、正徳六年以降に『和漢三才図会』の版木管理のありように変化があったものと思われる。

このように、大坂の五書肆が『和漢三才図会』の成立当時に近い段階から版木の管理に関わっていた可能性が確認できた。したがって、他の書肆から刊行された諸本について版権侵害の疑われる点がある場合には、彼らによって逐一に指摘・修正要求することがあったものと思われる。その一つとして、『倭漢節用無双嚢』初版での蝦夷地の文字情報も（そしてまた、朝鮮半島の文字情報も）指摘を受けたのであろう。本屋仲間の記録類には明記されていないところからすると、ごく内々に指摘があり、それをもとになかば自主的な形で再版時に削除したものと想像される。前節の「大日本国図」の場合は『大万宝節用字海大成』の版元に大野木市兵衛があったわけだが、蝦夷図の場合にも『和漢三才図会』の版元に大野木の名が見えるのは注意されよう。

第四節　『節用集大系』の陥穽

〔一〕学術的意義

人文学の一部には、近世節用集の付録類を用いて、近世の文化・文明を考察しようとする向きがある。一八世紀以降、内容が多岐にわたる節用集の付録記事が、近世人の社会生活上の規範となり、ひいては近代化を準備する教養的素地を培ったとするものである。このような総体的な見地からの考察についで、人文学の個々の分野での、近世節用集の付録利用も目にするようになったが、それらは『節用集大系』を資料とすることが多いように思われる。むしろ、近世節用集へのアクセスを容易にした『節用集大系』があればこそ、これを活用しようとの発想から成された研究・検討が存するという順序であるかもしれない。新たな研究を誘い出した点において『節用集大系』の学術的意義は最大限に評価されるべきものと考える。

これまでにも古本節用集・近世節用集の複製・影印は刊行されてきたが、さすがに量的には、特に近世節用集については寥々たるものであった。ただ、規模だけでいえば、亀田次郎旧蔵の節用集二〇〇本強が、早く『江戸時代流通字引大集成』（雄松堂フィルム一九八八。『解説目録』は一九九〇）に収録されてはいた。が、専用機器を要するフィルム状態では、参照するにも手間を要するし、諸本の比較にも手を煩わされる。『節用集大系』が惹起したような多方面にわたる学的成果には直結することがなかったのである。

ただ、すでに見てきたように、『節用集大系』は、その利用様態によっては、少々

では済まされない欠陥を含みもつものである。近世版本というものが何物であるかという点さえ抑えられていれば、過誤は回避できるので、その方面での手ほどきを受けることが求められるが、もちろん、それは自学自習でも補いうるものではある。要は、簡便な資料群ではあっても、高等学校までの教科書のように周到かつ長年のブラシュアップを受けたような、誤りのないものではないことを知っておきたいということである。教科書にはさらに指導書なる指導者用マニュアルも存するところで、いわば、二重三重に取り扱いへの注意と手間が注がれている。が、最前線の研究対象たる資料にあっては、行き届いたマニュアルなどないことの方が普通であろう。細心の注意をもって最新の知見を照らし合わせて、回答へとにじり寄るしかないのである。ことに、他分野から提示された資料群には、一層の注意が必要であるはずである。

〔二〕欠落する諸本

まず気になるのは、『節用集大系』所収本が、ほぼ亀田次郎旧蔵書にかぎることである。亀田のコレクションは国内有数のものだが、その質については考慮すべき点もある。『節用集大系』では、他のコレクションによって補うという発想はないので、節用集史においてポイントとなるような諸本を欠くことが少なくないのである。

たとえば、『倭節用（集）悉改嚢』は一八世紀中ごろの節用集の代表格の一つで、元文六（一七四一）年の初版以降、宝暦三（一七五三）年・同一二年・安永五（一七七六）年と再版もなされたが、『節用集大系』はどの版も収載しないのである。また、一九世紀の節用集では、早引節用集に対抗すべく本文・付録とも大幅に増補したものが行なわれたが、その嚆矢である『都会節用百家通』は寛政一三（一八〇一）年の初版以降、文化八（一八一一）年・文政二（一八一九）年・天保七（一八三六）年と再版もなされたが、やはり『節用集大系』はどの版も採らないのである。不可解というほかない。

また、初版に依らずに、再版本を掲げることが多いのも気になるところである。

大広益節用集（元禄六〈一六九三〉年初刊）→明治年間刊本
大広益字尽重宝記綱目（元禄六年初刊）　→天明元（一七八一）年刊
懐宝節用集綱目大全（享保二〈一七一七〉年初刊）　→文化九（一八一二）年刊
和漢音釈書言字考節用集（享保二年初刊）　→万延元（一八六〇）年刊
蠡海節用集（元文五〈一七四〇〉年初刊）　→文久三（一八六三）年刊
字典節用集（寛延四〈一七五一〉年初刊）　→寛政三（一七九一）年刊
文会節用集大成（宝暦六〈一七五六〉年初刊）→文政二（一八一九）年刊
〔増補改正〕早引節用集（宝暦七年初刊）　→明和七（一七七〇）年刊
〔増字百倍〕早引節用集（宝暦一〇年初刊）　→安永五（一七七六）年刊
早考節用集（宝暦一一年初刊）　→天明五（一七八五）年刊
新撰正字通（明和六年初刊）　→文政五年刊
大豊節用寿福海（安永六年刊）　→寛政一一年刊に
万代節用字林蔵（天明二年初刊）　→寛政七年刊によ
倭漢節用無双嚢（天明四年初刊）　→寛政一一年刊に
大全早引節用集（天明八年初刊）　→文政一〇年刊に
万宝節用富貴蔵（天明八年初刊）　→享和二（一八〇二）年刊
倭節用集悉改嚢（文政元年初刊）　→文政九年刊
永代節用無尽蔵（天保二〈一八三一〉年初刊）→嘉永二（一八四九）年刊
〔早引〕永代節用集（天保一四年初刊）　→嘉永三年刊

一〇〇年以上も隔たるものがあるのは、いかがであろうか。単純に古い版木を利用したものもあれば、改版したものを利用したものもあるが、後者の場合、検討目的によっては致命的な過誤を引き起こす場合もありそうである。

〔三〕初版本への注意

あるいは、初版本と『節用集大系』所収本との年数差が小さければ、悪影響は少ないとも考えられそうだが、研究対象とする記事・部分によっては年数差の多寡は問題ではない。たとえば、同一刊年の同版本であっても差が生じるのが、近世節用集の——より正確にいえば、節用集にかぎらず版権問題にさらされることの多い類の刊本の——実態だからである。

一例を挙げよう。同じ『倭節用集悉改嚢』文政元年刊本でも、初刷と後刷とでは記

事内容の異なりが認められるのだが、国文学研究資料館の新日本古典籍総合データベース所収本でいえば、筑波大学本（初刷）と横山邦治本（後刷）が好対照である。まず、巻頭付録の「改正御武鑑」では各大名等の鑵印まで掲出するのが筑波大本であり、この鑵印を一括削除するのが横山本である。また、「大日本図之図」の三か所に「羅経図」（コンパスローズ。方位を示す）とそれを通過する経線をあしらうのが筑波大本だが、経線を削除するのが横山本である。その初刷のなかでも異なりがある。「御公家鑑」の「親王家」下にある「閑院宮」に「孝仁親王」などと記載があるのはまだ後のものであり（筑波大本）、空格のままなのがさらなる初刷なのである。

このようなことからすると、単純に初版本さえ見ておけばよいというものでもないことが明らかであろう。したがって、その初版すら避け、再版本などに依ることの多い『節用集大系』というものを研究資料として扱う場合には、それ相応の注意が必要であり、これを怠れば、その研究の正確性を損なうことにもなりかねないことを覚悟する必要があることになるのである。

〔四〕『節用集大系』の陥穽

『節用集大系』には、亀田次郎旧蔵書一つに依るという潔さないし美名があるのかもしれないが、それは亀田旧蔵書の優秀さをそのまま引き継いでこその価値であって、一〇〇巻の規模まで引き上げるのであれば、さすがに玉の合間に多くの石が入り込むことを覚悟しなければならなかった。つまりは、編集企画の段階で、見積もり違いがあったということなのである。

複製本を作る際には、印刷時に「つぶれ」などが起きないよう、保存状態の良質な底本を選定するのがこの種の作業の基本なのだが、亀田旧蔵書に限るとした時点で、すでに選択肢は失われているのであった。研究上の良本があったとしても、印刷に耐えられない保存状態のものは、採りえないのである。

また、大空社の他のシリーズ物でもそうだが、モノクロ二値による複製を好んで採用するのも気になるところである。階調（グラデーション）を再現する手法は初めから選択肢にはない、と言っているかのようである。コスト意識が働いての選択なのだろうが、現代のコピー機でも、相応にグラデーションを再現できることを思うとき、モノクロ二値に限るのは、素人目にも残念というほかない。多少、保存状態が悪いものでもグラデーション再現で持ちこたえることができないではないと思うからである。

このように見ると、研究上の利点よりも、見やすさや印刷耐性とでもいった点から諸本が選定されていったことは容易に推測できる。その結果の一端については先に見たとおりである。さすがに、『倭節用集悉改大全』は謙堂文庫蔵本に差し替え、印刷のため難読となった箇所については『翻字集』（一九九六）にて補ってはいるのだが、それはやはり『節用集大系』のための弥縫策であって、広く近世節用集の研究的利用に資するものとはなりにくいように思われるのである。

実際的な問題の解決法に言及しよう。『節用集大系』で「あたり」をつけておき、必要であれば初版本なり、場合によっては初版本であっても数本を取り寄せて比較検討するといった作業が必須になるものと考えたい。こうしたことは、近世文学に通じた研究者であれば、あたりまえのようになされていることではある。

もちろん、事象の大要が知られさえすればよい、という向きには『節用集大系』だけで十分であるかもしれない。石山秀和（一九九八）や久岡明穂（二〇一三）のように「日本図が付録されるか否か」という、一種、大まかな傾向を把握するための調査であれば『節用集大系』で済むかもしれない。が、米家のように「どのような日本図が付録されるか」といった質的問題まで踏み込もうとするのであれば、『節用集大系』では荷が勝ちすぎるのである。

近世節用集において版権問題を惹起しやすいのは、付録部分である。ことに一八世紀の節用集では、早引節用集関連のものを除けば、その比率は一段高いものとなる。佐藤（二〇一七）では本屋仲間記録を中心に節用集関係の版権問題を網羅的に検討したので、参照していただければと思うのだが、『倭節用集悉改嚢』文政元年版における初刷・後刷の差についてまではカバーできなかった。記録類によるだけでは解明しきれない問題のあることを改めて知るのだが、他山の石となれば幸いである。

注

（1）初版刊記では「享保／十八／癸丑／九月／吉日」とまず記され、その左下に「寅

四月出来」とある。いま、享保一八年を刊年として採ったが、実際の刊行は「寅四月」によって翌享保一九年を採るべきかもしれない。なお、「寅四月出来」は元文三年・元文五年刊本にも存するが、削除されなかったに過ぎないものと思われる。刊行年としてはそれぞれ元文三年・五年を採ってよさそうである。

（2）北海道大学蔵本では、本来の巻頭付録と辞書本文のあいだに別の節用集からの付録三〇丁が挿入されており、結果、寛文の『扶桑国之図』に似る「大日本国之図」も掲出されており、注意を要する。

参考文献

秋岡武次郎（一九三四）「地図学史」『岩波講座地理学』（総論）

蘆田伊人（一九三〇）「日本総図の沿革」『国史回顧会紀要』二。文明協会（一九三三）『日本と世界』一一に再録。別途付記あり。

石山秀和（一九九八）「節用集の出版と普及過程」『立正大学大学院年報』一五

上杉和央（二〇〇七）「日本図の出版」。京都大学大学院文学研究科地理学教室・京都大学総合博物館編『地図出版の四百年』ナカニシヤ出版

上田万年・橋本進吉（一九一六）『古本節用集の研究』東京帝国大学文科大学（勉誠社復刻、一九六八）

小野田一幸（二〇一五）「近世刊行大坂図の潮流」。脇田修監修『近世刊行大坂図集成』創元社

海田俊一（二〇一七）『流宣図と赤水図』アルス・メディカ（改訂第五刷〈二〇二一〉による）

柏原司郎（二〇一二）『近世の国語辞書　節用集の付録』おうふう（増補改訂版、二〇一五）

川村博忠（二〇一〇）『江戸幕府の日本地図』吉川弘文館

米家志乃布（二〇一五）「人々にとっての近世日本のかたち」。田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか』笠間書院

米家志乃布（二〇一六）「近世日本における庶民の「蝦夷地」像」『法政大学文学部紀要』七二

米家志乃布（二〇二一）『近世蝦夷地の地域情報』法政大学出版局

佐藤貴裕（一九九〇a）「早引節用集の流布について」『国語語彙史の研究』一一、和泉書院。佐藤（二〇二一）『節用集史の諸問題』汲古書院に改稿再録

佐藤貴裕（一九九〇b）「近世後期節用集における引様の多様化について」『国語学』一六〇。佐藤（二〇一九）『近世節用集史の研究』武蔵野書院に改稿再録

佐藤貴裕（二〇一四）「〔書評〕柏原司郎著『近世の国語辞書　節用集の付録』」『國學院雑誌』一二八六

佐藤貴裕（二〇一六）「節用集の付録による教養形成研究のための覚書」。井上泰至編『近世日本の歴史叙述と対外意識』勉誠出版。佐藤（二〇一九）『近世節用集史の研究』武蔵野書院に改稿再録

佐藤貴裕（二〇一七）『節用集と近世出版』和泉書院

佐藤貴裕（二〇二二）「近世節用集付録研究のための覚書——日本図をめぐって——」『書物・出版と社会変容』二九

島田勇雄（一九八五・一九八六）「解説『和漢三才図会』上・下」。島田勇雄・竹島淳夫・樋口元巳訳注『和漢三才図会』二・三（平凡社（東洋文庫））

高澤光雄（二〇一八）「北海道の山名変遷」『山岳文化』一九

樋口元巳（一九八六）「『和漢三才図会』地理部の粉本」『神戸商船大学紀要　第一類』三五

久岡明穂（二〇一三）「近世節用集における教養の浸透」。鈴木健一編『浸透する教養』勉誠出版

山田忠雄編（一九六一）『開版節用集分類目録』自家版

＊本稿は、日本学術振興会・科学研究費基金・基盤研究（C）二〇K〇〇六二七による研究成果の一部である。